

飢餓対策ニュース

わたしから始める、世界が変わる



ルワンダ・ピース国際学校で
日本の教会から送られてきた
絵本をみる子どもたち

「心の変革運動」の担い手として

東京基督教大学 学長 倉沢正則
(日本国際飢餓対策機構・理事)

最近、二つの事柄に心を痛めています。一つは連日報道されている「シリアの内戦」です。政権側と反政府勢力の紛争が泥沼化する中で、難民となったシリアの人々の悲惨さを毎日のように目にしています。その数は日を追う毎に増え続け、6月上旬の段階で160万人といわれ、このままだと年末までに350万人の人々が難民となると予測されています。

隣国レバノンやヨルダン、トルコも彼らの受け入れに限界を迎えています。難民キャンプの映像は食料不足や劣悪な衛生環境を映し出し、子どもたちの恐怖に満ちた表情を見ると、痛ましい限りです。彼らの瞳はどこを見つめているのかと慮ります。家族や友人と過ごした平和だった故郷は破壊され、その作物を生み出す田畑は荒廃してしまいました。

もう一つは、日本での事件で、幼い子どもが親に「放置」されて餓死するというニュースです。このような事件が後を絶ちません。育児放棄や親の都合で子どもが犠牲とされる昨今に、子どもたちの呻き声が響きます。それなりに平和で、食料や生活環境がある程度整っている日本で、「餓死」という現実と直面させられるのです。背後に様々な理由が

あっても、なすすべもない子どもが「放置されて餓死」してゆく社会は健全とは言えません。その社会を構成する一員の私もその責任を問われて心が痛みます。飢える世界の主要な原因が「争い」であることは明かです。私たち人間の紛争が「飢餓」を生み出し、私たち大人の「欲望」が、特に、幼い子どもたちを「飢え」の中に追いやるのです。

「飢餓のない世界 (ハンガーゼロ)」を広げてゆく働きには、すでに飢えている人々のことを知り、その悲惨さに私たちの思いを向けて、持てるものを分かち合うことと、そのような「心」を、この社会にあって多くの人々の中に起こしていただくことが必要です。紛争を終結させる見識ある調停者や、幼い子どもを守る社会的な仕組みづくりに奮闘する人々がさらに起こされるとともに、私たち一人ひとりが「心の変革運動」の担い手となることが求められます。まず「私から始める」こと、「自分にしてもらいたいことをほかの人にもする心」や「自分のことばかりでなく、他の人のことを顧みる気持ち」が起こされることを求めることこそ、世界を変える「大きな一歩」だと確信しています。「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それは、キリスト・イエスのうちにも見られるものです。」

●東日本大震災被災者支援と募金を継続しています！

飢餓のない世界を実現するための第一歩
ハンガーゼロ・サポーターになろう！ 現在… 2 | 8 | 3 | 5 | 口

■ハンガーゼロ・ファシリテーター・トレーニング 参加者募集！

当機構を通じて海外のパートナーと共に活動することを希望する方々や、国際協力に関心をお持ちの方々のための学びと準備の機会です。ぜひご参加ください。

日程：7月29日(月)～8月2日(金)

会場：グレース宣教会 紀勢チャペル
三重県会郡大紀町野崎 1362

費用：2万9千円 募集：10名

お問い合わせは、大阪事務所・吉本まで。

■キングダムビジネスが事務所移転

フェアトレード商品や手作り作品、本などの販売で当機構に協力いただいている(株)キングダムビジネスの事務所が6月6日下記に移転しました。新所在地は、大阪市営地下鉄谷町線「谷町4丁目」④番出口、西へ徒歩2分。パン・アキモトが新たに開設したNPOビルの6階。商品購入のために直接行くことも出来ます。今後ともよろしくお願いいたします。

〒540-0026 大阪市中央区内本町 1-4-12

NPOビル6F (営業は月～金の午前9時から午後5時。土・日は休み)

TEL: 06-6755-4877 FAX: 06-6755-4888

ウェブ: <https://www.kbwin-win.org/>

■書き損じはがき、書籍、DVDで国際協力に貢献しよう！

かもメールなど暑中見舞いハガキや年賀状を書き損じで、ポストに未投函(消印のないもの)のものがあれば、ぜひ大阪事務所にお送りください。また記念切手など未使用切手も大歓迎です。ハガキは古いものでも構いません。(私製は不可) また、読み終わった書籍やマンガ、ゲームソフト、DVDは、愛知事務所でお引き受けして、換金して支援にまわすことも出来ます。愛知事務所にお問い合わせください。

今すぐ▶▶▶ 各種支援のお申し込みができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

- ☐ ハンガーゼロ・サポーターとして協力します。
毎月 () 口 (1口 1,000 円)
- ☐ チャイルド・サポーター(世界里親会) になりたいので説明書(申込書)を送ってください。
- ☐ 海外スタッフ・サポーターとして協力します。
毎月 () 口 (1口 1,000 円)
- ☐ JIFH(日本国際飢餓対策機構) サポーターとして協力します。
毎月 () 口 (1口 500 円)
- ☐ 郵便自動引落し申込書を送って下さい。
- ☐ その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

フリガナ 氏名: _____ 男・女

〒 _____

フリガナ 住所: _____

(電話) _____

▼申込日: _____ 年 _____ 月 _____ 日 ▼NL 号 _____

FAX・072-920-2155

国内災害に対応するハンガーゼロ自販機が登場

パン・アキモト、キリンビバレッジ、当機構が協働で、備蓄型・新ハンガーゼロ自販機の設置を勧めています。これは従来のハンガーゼ



ロ・自販機の隣に、水とパンの缶詰を収めた備蓄ボックスを設置、アフリカの飢餓対策支援に加えて、懸念されている大規模災害に備える

ことができるものです。備蓄ボックスにはアキモトのパンの缶詰 96 缶とペットボトルの水 96 本を収納。国内災害発生時には、自販機設置者が緊急食料として自由(無料)に使うことができます。この水とパンは賞味期限を残して2年毎に入れ替え、使わなかった分は当機構を通して飢餓に苦しむ人々と福島被災者支援に用いられます。

自販機の設置希望者を募集しています。大阪事務所まで。設置費も無料で月2千円程の電気代のみ。

■発行者 岩橋竜介

■発行所 一般財団法人 日本国際飢餓対策機構

いいね
大募集

Webサイトアドレス <http://www.jifh.org/>
eメールアドレス general@jifh.org
フェイスブック <https://www.facebook.com/hungerzero>

■募金方法 ※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウェブサイトで

●郵便振替 00170-9-68590 / 日本国際飢餓対策機構

●他の金融機関からの自動振替 ●クレジット、デジタルコンビニ

今すぐ
募金が
できます！

銀行からの自動振替
ゆうちょ銀行
その他の金融機関

クレジットカード決済
VISA

コンビニ店頭で現金払込
ファミリーマート
セブンイレブン
ローソン
ミニストップ

大阪 〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1

TEL (072)920-2225 FAX (072)920-2155

東京 〒101-0062 千代田区神田駿河台 2-1 OCCビル 517 号室

TEL (03)3518-0781 FAX (03)3518-0782

愛知 〒466-0064 名古屋市中区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター 2F

TEL (052)731-8111 FAX (052)731-8114

広島 〒730-0036 広島市中区袋町 4-8 CLC ブックス 2F

TEL (082)546-9036 FAX (082)546-9037

沖縄 〒901-0156 那覇市田原 3-8-1 ユリ香ハウス 201 号

TEL (098)859-4585 FAX (098)859-4540

東北 〒980-0012 仙台市青葉区錦町 1-13-6 エマオ 2 階 E

TEL (022)217-4611 FAX (022)217-6651

毎月、飢餓対策二ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所(八尾市)、生活愛、関西地区のボランティアの皆様が、送作業のご協力をして下さっています。

子どもたちの小さな変化という第一歩

5月下旬に世界里親会の支援先である、フィリピン・ピコール地方のスラ、マトノグ地区、そしてミンダナオ島ティボロ村の3ヵ所を訪問してきた碓井スタッフの報告です。

今回は、訪問地の一つティボロ村にあるアポセンターについて報告させていただきます。アポセンターの働きが始まって3年目になりますが、その原点は字が読めない村人が町に行っては騙されて帰ってくることに心を痛め、教育の機会が与えられるように願った牧師の祈りです。

首都マニラから約2時間の空路でミンダナオへ、さらに陸路を約3時間行ったところに、アポセンターがあります。まず降り立ったミンダナオ島ダバオ市は、整備された道路を走る日本車、建ち並ぶ商店、大規模なショッピングモールなど、車窓から見える風景は私が住んでいる所と比べて大差はありませんでした。

しかし、そこからアポ山中腹にあるティボロ村を目指してほんの1時間ほど走ると景色は一変します。目の前に広がる南国の木々、

プランテーション農園のバナナの木々、わだちが残るデコボコ道を登る途中には、馬に乗って移動する人にも出会いました。

私たちがティボロ小学校に到着するとすぐに、子ども達が走り寄って来て小さな手を差し出し握手を求めてきました。その手を握ると私の手を額につけて、「マガンダン ハポ（こんにちは）」と屈託のない笑顔で挨拶をしてくれました。翌週に新学期のスタート



子どもたちの家庭訪問の様子

を控え、学校はまだ夏休みでしたが、私たちを歓迎する集会を開いてくださり、子どもたちによるダンスパフォーマンスや聖書の中に出てくる「善きサマリヤ人」の劇を披露してくれました。集会の最後には、先生が一人一人の名前を呼んで里親会からのプレゼントを手渡し、子ども達は嬉しそうに受け取っていました。

子どもの成長を喜ぶスタッフ

午後からは、2人の里子の家を訪問しました。そのうち1人の家は大人の足でも30分程かかる、険しい急な斜面を下った所にあり、毎日この道を歩く

里子の生活の厳しさを体感しました。そして夜には、スタッフから里子の様子を聞く事ができました。里親会のスタッフは皆、住みなれた故郷を離れ、この村で生活している青年達です。「怖がっていたが心を開くようになった」「落ち着きがなかったが集中するようになった」「悪い言葉を使わなくなった」「自信を持てるようになった」「活動的になった」等々、折しも夕方から強い雨が降り始め、停電していた中だったのですが、非常灯を点す暗がりの中で里子について語るスタッフの顔は明るく輝いて見えました。



アポセンターの子どもたちと碓井

子ども達の中にすでに起こっている小さな変化の数々は、やがてティボロ村の大きな変革へとつながって行くことが期待できます。しかし、それが実現するためには、子ども達の家庭、教会、里親会のスタッフを含む地域のリーダー、そして日本から支えてくださる里親の皆様、そして当機構、それぞれが愛をもって役割を果たして行くこと、そして互いの結び目がしっかりと結ばれていくことが肝要です。そのためにも「見たこと」「聞いたこと」をしっかりと伝えなければならないという思いを強くしました。



里親会からのうちのプレゼントを貰って喜ぶ子どもたち

●チャイルドサポーターになりませんか！ 毎月4,000円で一人の里子を応援することができます。世界里親会まで。

東北ヘルプ事務局長 川上直哉
世界食料デー仙台大会実行委員会 実行委員長

求められる被災地教会の役割

孤立も不安もモノやカネでは解決できない

3年目の被災地より、主にある平和をお祈りいたします。多くの方々からの祈りとご支援に、心から感謝いたします。

恐怖をもって思い出される津波の爪痕も、「がれき」の撤去と共に、見えなくなりました。他方、無数の遺体の折り込まれた瓦礫を見て過ごさなければならなかった数週間は、深い心の傷となり、人々を今も苦しめています。見た目の平常と、見えない痛みが、混在して被災地にあります。そこに、風化という現実の切なさがあります。被災者の「孤立」という問題が、そこに浮き彫りになってきます。

暗中模索する原子力発電所爆発事故の処理は、悪戦苦闘しています。何も変化しないまま、異常事態が日常化してしまいました。通常、どのガイガーカウンターも、「0.3」という数値で警報音をけたたましく鳴らします。しかし、放射能汚染地における路地や林では、「1.0」や「2.0」という数値が、普通に確認されます。もう誰も、ガイガーカウンターの警報音を鳴らしません。そして、昨年まで「通常」とされた人数の40倍から2400倍の発症件数で、子どもの甲状腺癌が確認されたそうです。老人の心筋梗塞の数が、2倍以上になっているそうです。しかし、それはすべて「放射能とは関係がない」とのこと。こうして「不安」が

募ります。

「孤立」も「不安」も、モノやカネによって解決するものではありません。ですから、行政官や政治家や医療者が必死に努力していますが、問題は解決しない。そうした諸機関と共に、人々の魂に寄り添い、不安を共にし、その上でなお、絶望に抗して立ち尽くす、そんな働きが必要です。それこそ、教会の役割ではないでしょうか。

放射能計測所「いのり」の使命

外部被ばくと共に、食べ物や呼吸によって体内に入ってしまう、身体の中から放射線を浴びてしまう「内部被ばく」の問題があります。この問題に対処するべく、仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク（通称：東北ヘルプ）といわき教会連合震災復興ネットワーク（いわきSARSネット）が協力し、宮城県仙台と福島県いわきに、食品放射能計測所「いのり」を設置しました。「いのり」は放射能計測だけでなく、「不安に脅かされる魂をケアする」ことが目標です。

体内に入ってしまった放射性物質は、体から排出されるまで放射線を出し続け、細胞を傷つけることになります。計測所では食品のみならず、尿と母乳の計測もします。不安と闘うためには、まず現実を見なければなりません。現実に向き合った後、生活の中で放射

能と闘う日々が始まります。その際に必要なのは情報です。

放射能計測所では、自分たちで知りうる様々な情報を整理し「食卓から考える放射能のこと チェルノブイリから受け継ぐべき知恵」（いのちのことば社）という本を出版しました。食事で放射能のダメージを最小化するために出来ること、放射能に負けないレシピ集なども掲載して不安を少しでもやわらげる助けになればと願っています。

被災地の教会は疲れ、弱っています。しかし、祈りによって支えられています。被災地の教会も他者のために祈りの輪に加わろうとしています。2011年秋、タイの洪水を覚えて、私たちは「世界食料デー仙台大会」を開催しました。そして今年は、コンゴ民主共和国で内戦によって国内難民となった人々を支援するために、教会が立ち上がり、いのちの糧を届けて行こうという働きが始まったことを飢餓対策ニュースで知りました。その様子は、今の被災地の教会の姿に重なります。

できることは少ないかもしれませんが、私たちの働きは孤立していない。そのことを覚えるために、祈りがあります。その力は、大きなものであることを確信しています。



同書では、放射能に負けないレシピなども紹介、生活者の視点で分かりやすい内容になっています。

●東日本大震災被災者募金に引き続きご協力ください。ウェブから銀行自動引落しやクレジットカードも使えます。



●中央・西アフリカ担当
コンゴ民主共和国駐在
ジェローム・カセバ

この6月中旬から、中央及び西アフリカ担当スタッフとしてコンゴ民主共和国に赴任しました。これから地元パートナー団体と連携しながら、食料不足や内戦から逃れたきた人々、貧困の中にある子どもへの支援などをすすめていきます。

【ジェロームに聞きました】

Qコンゴ人であり、日本の大学で学んだジェロームが、これから進める活動はどんなものになりますか。

日本留学では、国際関係について、特に人間の安全保障について専門的に学びました。いまコンゴでは内戦だけでなく、周辺国の反政府武装組織の脅威が続いており、とくに東部では国内避難民も多く出ています。JIFHはすでにルブンバシでそうした難から逃れてきた人々への支援を地元のキリスト教会と連携して行っていますので、まずはこの人々への支援を継続、治安が改善した段



階で出てきた村々へ帰還できるように助けていきたいと考えています。Q昨年ニジェールで実施した地域のリーダー対象の「善隣共生セミナー」も開催しますね。

赴任してすぐですがこの7月にセミナーを開きます。食糧支援も必要ですが、将来に向けて人々が自ら知恵を結集して、この国に最も適した開発のあり方を学ぶこと、そしてこのセミナーを通じて助け合いが生まれる関係づくりを構築していく機会になるようにします。JIFHからもリーダーが参加するので、現状の課題や支援のアイデアを話し合うよい機会となると考えています。

Qそのほかの活動は？

「ハンズ・オブ・ラブ・コンゴ」という名称で政府登録の手続きを進めています。私はコンゴ人ですが、JIFHから派遣され、日本の皆さまにも支援していただいている身分ですので、これから「ハンガーゼロ・アフリカ」の実現のために全力を注ぎます。又コンゴではストリートチルドレン（路上で暮らす子どもたち）に向けた活動も行っ検討を始めています。どうぞ祈りとともにハンガーゼロ・サポーターとなって応援をお願いいたします。



ハンガーゼロ・アフリカをさらに推進！

ルワンダとコンゴ民主共和国に駐在員を派遣

アフリカでの活動国



●コンゴ 国内避難民支援（ルブンバシ）



●ニジェール 善隣共生セミナー（今年8月にも計画）



●ソマリア難民への緊急支援（ケニア国内国境）



●ケニア シーブケア学校給食支援



●ルワンダ リーチのダンスプログラム

今年の秋から、東アフリカ担当スタッフとしてルワンダに赴任する河合朝子です。私はルワンダのパートナー団体であるREACHに派遣され、そこでの活動のサポートを行いながら、他の東アフリカのパートナー団体とJIFHや日本の皆様をつなぐ役割を担います。

ルワンダは1994年の大虐殺で多くの女性たちが夫を失い、多くの子どもたちが孤児となりました。多くの建物が壊されました。大虐殺にかかわった多くの人々が投獄されました。そして殺人者の家族は被害者がいる村の中で生きていかなければなりません。残された人々は、心と身体に深い傷を負いながら、飢餓と貧困の中を生きていかなければなりません。

新しく建てられたカガメ政権は、飢餓と貧困から抜け出すことを目標に、ルワンダ人が一つとなって国を再建することに努力してきましたが、ルワンダが一つになるには、人々

自身が心身ともに、そして社会的に癒されなければなりません。

現地パートナーREACH

REACHという団体は、癒し、和解、平和、持続可能な開発を進めるために1996年にルワンダ人のフィリバート・カリサ牧師によって設立されたNGOです。REACHによって、被害者、加害者双方のワークショップやセミナー、カウンセリングや心的外傷のリハビリ

を行い、それを通して人々の和解が実現してきました。さらに和解後の関係を深めるためにグループでの小規模プロジェクトや工芸品づくり、音楽やスポーツ活動が行われています(参：飢餓対策ニュース2012年12月・9月・3月号、2011年1月・11月号)。

REACHが、15年以上かけて進めてきた活動は現在、人々が持続的な自立に向かうようにサポートする段階にきています。私は、REACHの中で、ルワンダのスタッフと共にその役割を担っていきます。

大虐殺後、多くの国際NGOが緊急・復興支援のためにこの国で活動を始めましたが、その後、政府が国際NGOの介入を制限しました。ですから、貧困地域での農村開発をNGOからの援助に頼るという典型的な構図はほとんどなく、農村部を歩くと、他の途上国で見られるような、国際NGOが作った立派なトイレ数々や水道を見かけることはあり



●東アフリカ担当
ルワンダ駐在
河合朝子

ません。そういうインフラは整っていないのですが、私が出会った人々は一致して、貧困から抜け出すために自分たちでできることを既に始めている、そのような自主的な姿、自立した姿勢でした。

東アフリカの里親会もフォロー

大虐殺から19年、ルワンダはGDPの成長率が7.7%、識字率が71%と驚くべきスピードで復興を遂げていますが、その成長の背景には、憎しみ合うことなく、一つになる道を選んだという人々の心の変革、そして外からの援助ではなく、ルワンダ人の手によって国を復興させようとする国の姿勢があるように思いました。

ルワンダの復興の歩みの中で一生懸命生きる人々のことをこれから皆様にお知らせしていきます。さらに、東アフリカの様々なパートナー団体との活動、特にルワンダ・ケニアでの世界里親会の活動も日本の皆様にお知らせしていきます。ハンガーゼロ・サポーターとなってくださり、皆様と一緒にアフリカの飢餓と貧困と闘う人々を応援できればと願っています！



●ルワンダ ピース国際学校（世界里親会）



私が楽しむ100円よりも…

子どもの将来に希望をあたえる100円の価値

私たちがチャイルドサポーターになったきっかけは、国語の授業でラッセル・フリードマンの「小さな労働者」を習ったことでした。先生から中学生の私たちにもできる支援があると聞いた時、クラスのみんなでやりたいとすぐに決まりました。そのあと、私たちのイスマエル君に続いて他の2クラスも支援を始めました。私が里子の親になったという実感はあまりありませんが、里子3人の中で一番かわい、かついいとみんなで思っています。イスマエル君から手紙が届くのが私達の一番の楽しみです。（中村麻衣さん）

♥♥♥♥♥♥♥♥

私が支援を始めて早数ヵ月が経ちました。

支援している子にまだ会った事もないのに、今では妹の様な存在です。支援を始めて世界にはそれぞれの事情を抱えた沢山の子ども達がいることを知り、自分はどれほど恵まれた環境にいるのだろうと改めて感じさせられました。

また、里親になって人と人との

繋がりがやその温かさなど沢山の事を学びました。この事を通じて私は将来困っている人を助けられるような仕事に就きたいという夢も持てました。そのために今は自分に出来る事を精一杯していこうと思います。（長畑和子さん）

♣♣♣♣♣♣

私は今までこのような支援をしたことがなかったのでとても貴重な体験をさせていただけたと思



里子達に想いを込めてクリスマスリース（写真下）を作りました

ます。貧しい国について、テレビで見たことがあるくらいの知識しかありませんでしたが、今回、里子のアルバロくんと出会ったことで、大きく関心を持つことが出来ました。

月に1人が数百円寄付するだけで、1人の子どもが十分な教育を

受けられるというのは、とても素晴らしいことです。

この活動が世界中に広がれば、と思います。（田口歩さん）

♠♠♠♠♠♠

里親を始める前、「私たちがジュースやアイスに月に一度我慢するだけで、学校に行けない子どもたちが行けるようになる」と先生がおっしゃいました。この言葉で私は里親になる決心をしました。私が少し楽しむための100円と子どもたちが教育を受け、将来の希望を持つための100円のどちらの価値が高いかなど言うまでもないからです。

また、私は里親をする上で「里子の子を援助してあげている」というのはなにか違うと思います。

学校で勉強をし、不自由なく暮らせている私たちが教育さえ受けられない子どもたちに少し援助をすることは当然と言ってよいほどのことだと思うからです。

だから、私は里親をできる限り続けて行きたいです。（田村美帆さん）

大阪女学院中学3年

大阪女学院中学校の生徒さんが3年生全体でボリビアの子どもたち3人を里親として支援しています。支援を始めてくださったきっかけや感想を書いていただきました。



左から長畑さん、田口さん、田村さん、中村さん

パキスタン

2月号でお伝えしたパキスタン・カラーシャ族の女子教育の支援現場を訪問した藤谷スタッフの報告です。

少女たちが安心して学べる寄宿舎



寄宿舎で暮らす少女達とラザロス夫妻（後列⑥）

パキスタンの面積は日本の約2倍、人口は1億8千万人(世界第6位)、最大民族はパンジャブ人、言語はウルドゥ語、95%がイスラム教徒であるイスラム国です。治安が悪く危険であると報道されていますが、地元の教会や日本人宣教師、看護師の方々によって、教育支援や自立開発の働きが長年行われています。当機構も昨年からはペシャワールとムルタンにおける活動の支援を開始しています。4月下旬からこの二つの支援地域を視察させていただきました。今回はペシャワールでの教育支援について報告致します。

ペシャワールは政府の力が及ばないアフガニスタン国境に近く、タリバン等によるテロ事件が多発する所です。滞在中にも市内で自

爆テロが発生、死者10人含む約100人の犠牲者が出ました。安全の配慮から私達も宿舎の外にほとんど出られませんでした。

自宅を寄宿舎として開放

このような環境の中で、地元のラザロス牧師が「ガールズ・ホステル」を始めました。ペシャワールの北、チトラール県の山あいに住むカラーシャ族の女の子、小学校から大学生までの11人がここに住み、教育支援を受けています。

一般にカラーシャ族の特に女の子は、女性が高等教育を受けることに対して理解が低いため学校に行くこともままならないうえに、12～13才で結婚させられる子やストーカー行為によって学校に行けない子がとても多いそうです。そこでラザロス牧師がペシャワールで家を借り、女の子達が安心して生活し学校に行くことができるように、自宅を寄宿舎として提供しているのです。ここでの生活は規則正しく、午前はそのそれぞれの学校で勉強し、午後帰宅してお手伝い、そして勉強に集中します。彼

女達は安心して暮らしており、生き生きと勉強し、楽しそうに遊び、また喜んでお手伝いをしていました。この働きによって彼女達が希望を抱いて成長していることを本当に感じます。単なる学校教育では得られない全人的な教育支援がなされていると感じました。またラザロス牧師を始め大人達も意欲的です。話し合いの中で私たちの提案に耳を傾けてくださり、近い将来地元のNGOを設立し、里親会の活動を行いたいと希望されていました。

「将来弁護士になりたいです」。かつて村で男性につきまとい、学校に行けなかった最年長の女性が夢を語ってくれました。このガールズ・ホステルから弁護士が誕生したらどんなに素晴らしいだろう！感動と共に「夢をぜひ実現させて下さい。」と激励しました。彼女だけではなく、皆がそれぞれ夢を持っています。彼女達がもっと成長して変わって行けば、地域も国も変わって行くことを確信します。どうぞこのパキスタンでの働きをご支援下さい！



持参した文具とパンの缶詰を手にする少女